

Part 1

幕末開港から日本銀行設立へ —貨幣・社会経済史—

Nishiki-e related to Japan's currency history and socio-economic history

ここでは、江戸時代から幕末開港、明治維新を経て日本銀行が設立される頃までの貨幣・経済に関する錦絵を紹介します。

江戸時代、幕府は国内の鉱山で産出された金属を用いて金貨・銀貨・銅貨の3種類の金属貨幣を発行しました。日本は1858年に安政五カ国条約を結び、翌年に箱館・横浜・長崎を開港し、世界各国との本格的な貿易を開始しました。開港後、物価が高騰し、貨幣制度が混乱しました。明治新政府は、1871年に新貨条例を制定して「円」を新しい通貨単位と定め、円を単位とする金貨や銀貨、紙幣などを発行しました。しかし西南戦争後のインフレーションなど貨幣制度は不安定で、その安定をはかるため、1882年に日本銀行が設立されました。

開港以降の貨幣・経済の混乱や新しい貨幣制度は風刺画の題材となり、また西洋の影響を受けて新築された建物は名所となり、いずれも広く錦絵に描かれました。





01

マケロマケヌ 賣買大合戦 A battle over prices fought by armies symbolizing currency and commodities

落合芳幾 Ochiai Yoshitoku (1833-1904) / 1861 35 × 73 900506

幕末開港後の物価の高騰を、小判を大将とする貨幣軍（右）と米俵を大将とする商品軍（左）の戦いとして描いている。

1858年に安政五カ国条約が結ばれ、翌年に箱館・横浜・長崎が開港すると、生糸・茶・蠶などの輸出が急増し、国内で不足するようになった商品が値上がりした。商品軍の兵士として描かれた蠶燭の名は「蠶高小丸」となっている。一方、貨幣軍には洋装の外国銀貨や和装の多種の日本の貨幣が描かれている。中央では、腰に「上戸屋 呑助様」と書かれた帳簿を携えた酒樽と、一分銀が対峙している。

不平等条約として知られるこの条約により、日本の金貨が海外へ流出した。江戸幕府はそのため、1860年に金貨の重さを1/3にする改鋳を行った。このとき発行が開始された万延二分金は、その後財政赤字補てんのため大量に発行され、急激なインフレと経済の大きな混乱を招き、幕府の体制を根底から揺るがした。



02

古金銀貨一覽表 Gold and silver coins issued by the Edo government

歌川国利 Utagawa Kunitoshi (1847-1899) / 1889 37 × 24 900028

江戸幕府が発行した様々な種類の金銀貨が描かれた錦絵。両替屋の店頭や分銅形の両替屋の看板も描かれている。「壺両二付御定相場六貫八百文」と金銭相場が書かれているが、描かれている貨幣のうち、銭貨は江戸幕府が発行した寛永通宝ではなく、中世の渡来銭である永樂通宝である。また大判は、幕末に発行された万延大判で、長さ約13cm、重さ約110gと大判の中では小さいものであった。

この作品は明治政府により新しい金属貨幣が発行された後、古い金銀貨の一覧として描かれた。当時大量に出回った子供向けの玩具絵の一種であり、絵師の国利は数多くの玩具絵を残している。



03

諸国金山ノ図 Scenes from a gold mine

初代歌川芳豊 Utagawa Yoshitoyo I (1830-1866) / 1860 35 × 73 900030

江戸時代に日本最大の金銀山であった佐渡金銀山（現新潟県）を描いている。江戸時代、佐渡金銀山は幕府直轄の鉱山であった。生産された金は地金で金座へ運ばれ、金貨に加工された。3つの坑道の入口の真ん中の上部には繁栄や作業の無事を祈る幣が貼られている。中央の下では鉱石を掘っている。左の方では坑道内の排水をしている。鉱山では、排水作業は重要で慎重を要する作業であった。江戸時代の佐渡金銀山の様子を描いた絵画は絵巻の形態で数多く残されており、それらをもとに江戸時代の終わり頃に錦絵が描かれた。



04

豊国漫画図繪 岩淵彌七 A robber takes money from a wallet; from the series Toyokuni's Caricature Pictures

三代歌川豊国 Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 1860 37 × 25 900344

歌舞伎役者三代目市川市蔵を講談の通称「東海白浪」（実在の盗賊をモデルにした物語）の登場人物・岩淵彌七に見立てている。顔に手拭いを巻いた彌七が、紙入より小判を取り出し、紙入を放り投げている。紙入は鼻紙入ともいい外出時の小物や貨幣を入れ、財布の役割も果たした。

「豊国漫画図繪」は、三代歌川豊国が1859～1860年にかけて制作した全29図の役者絵のシリーズ。豊国は歌舞伎との関係が密接で、実際の興行とは無関係に、当時活躍していた人気役者が歌舞伎や講談の登場人物に扮したシリーズを手掛けた。



05

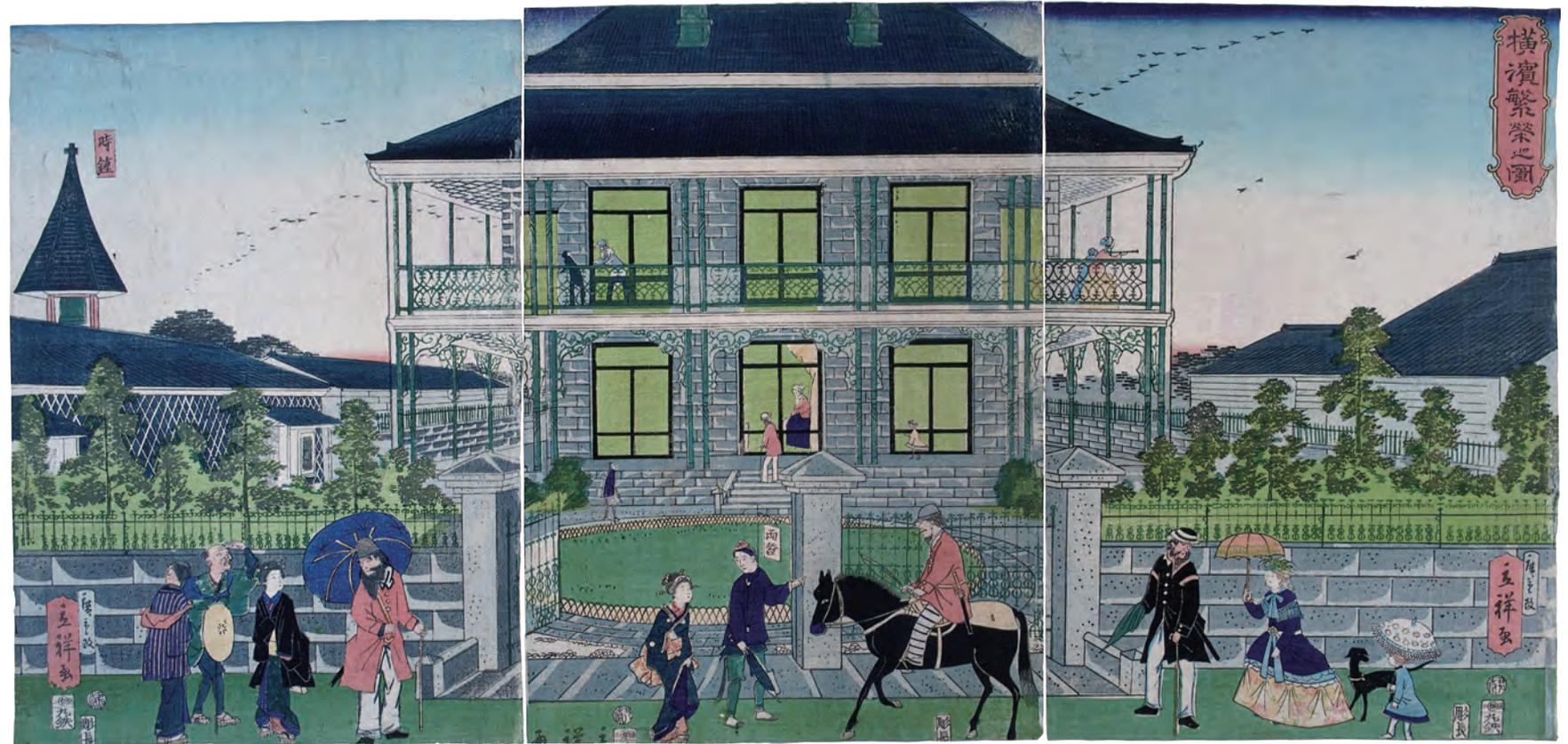
和田しづま 尾上松助

A samurai receives wrapped gold coins from his master in a scene from a Kabuki play
三代歌川豊国 (国貞) Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 19世紀前半 early 19th century 38 × 26 900375

描かれている役者は二代目尾上松助。江戸時代初期の実話で岡山藩の渡辺数馬による弟の仇討ちを元にした歌舞伎『伊賀越乗掛合羽』の一場面。父を殺され、敵討ちに向かう和田静馬に、主君菅田内記が饒別の金貨を与えている。

折敷に包金が載せられ、包紙の表面には「金百両」と書かれ、小判100枚が包まれている。儀礼の場面では、貨幣を紙に包んで授受することが広く行われており、現在でも冠婚葬祭の際に、その習慣を見ることができる。

三代歌川豊国(1844年まで歌川国貞)は、幕末を代表する絵師で、多くの作品を残し、歌川派の隆盛を築いた。作画領域は幅広いが、役者絵に優れている。



06

横濱繁栄之図

The Yokohama branch of the Chartered Mercantile Bank of India, London, and China
二代歌川広重 Utagawa Hiroshige II (1826-1869) / 1865 35 × 74 900193

開港直後に日本に支店を開設した銀行の一つである、The Chartered Mercantile Bank of India, London, and Chinaの横浜支店(1863年開設)の建物を描いた作品である。

当時は鉄製の門扉が珍しく、人々は鉄門銀行とよんだ。入口に「両替」と書かれており、日本と外国の貨幣の両替業務を行っていた。同銀行の一員として来日したイギリス人シャンド(Alexander Allan Shand, 1844-1930)は、後に明治政府に雇われ、銀行簿記や金融業務を指導し、日本金融界の近代化に尽くした。左端に見える時鐘は1862年に建設されたカトリック教会「横浜天主堂」である。開港以降、こうした横浜の洋風建築や港の風景・外国人の風俗などが錦絵の題材として多く描かれ、「横浜絵」というジャンルが確立された。絵師の二代歌川広重は、横浜絵を多数残している。



07

樹上商易諸物引下図 Townspeople try to pull products down from a tree, symbolizing the struggle with high inflation

三代歌川広重 (重政) Utagawa Hiroshige III (1842-1894) / 1865 36 x 75 900508

開港後の物価上昇の風刺画。木の上に、当時値上がりした品物が描かれており、人々が綱を引いて上がりすぎた値段を降ろそうとしている。例えば左の上部には魚・野菜や綿、中央に酒樽や蕎麦屋・蒲焼屋の看板、右には米俵や煎茶の缶などが描かれている。

1859年に各国との貿易が開始され、万延の改鑄や政治の動乱の中で物価の上昇が続いていたが、この作品が描かれた1865年には第二次長州征伐などにより一段と物価が高騰した。

絵師の三代歌川広重は、開港後の世相を描いた錦絵を多数残している。



08

浪花川崎鑄造場之図 The Mint Bureau in Osaka in Spring-1

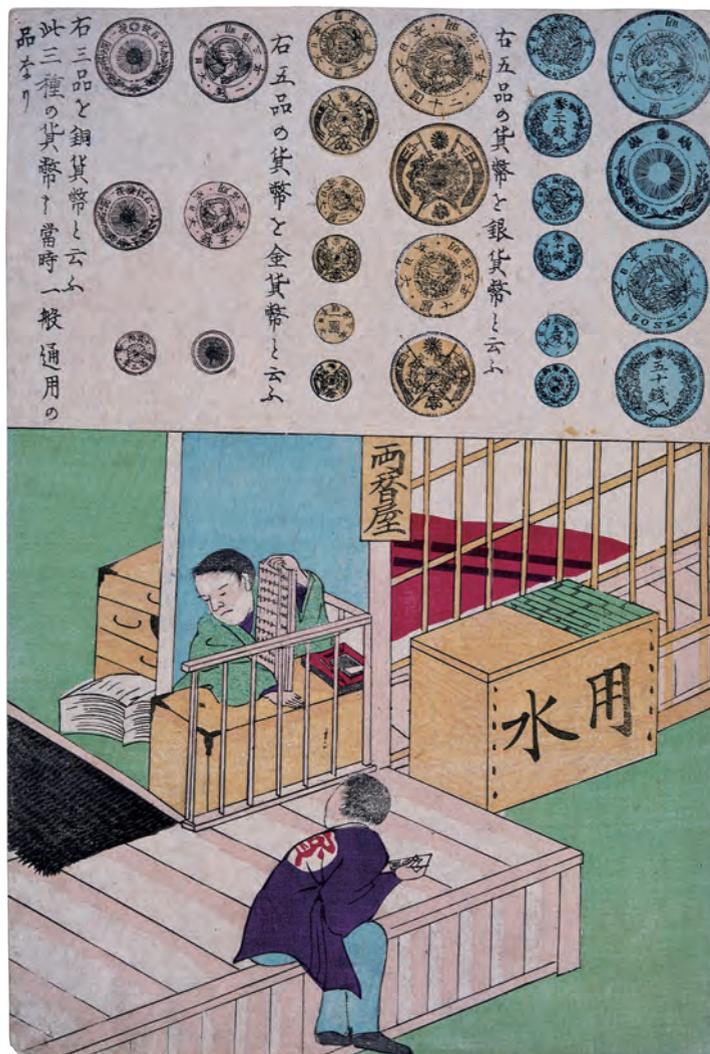
二代長谷川貞信 (小信) Hasegawa Sadanobu II (1848-1940) / 19世紀後半 late 19th century 17 x 37 900008

09

浪花名所之内川崎造幣局 The Mint Bureau in Osaka in Spring-2

二代長谷川貞信 (小信) Hasegawa Sadanobu II (1848-1940) / 19世紀後半 late 19th century 17 x 37 900010

大阪川崎の造幣寮の工場 (1870年竣工) の風景が、桜や大川と共に描かれている。明治政府は、近代的な貨幣制度の確立に向け、貨幣製造工場の建設にいち早く着手、イギリス人ウォートルス (Thomas James Waters, 1842-1898) の設計・監督のもと、工場の建設を大阪で始めた。この地が選ばれたのは広大な敷地が確保できることと、川に隣接し水運がよいことによる。1869年に大蔵省内に造幣寮が発足すると、1870年には工場の操業を開始し、翌年から発行される円単位の貨幣を製造した。工場一帯は桜の名所で、1883年より春に工場内の桜並木が一般公開されている。工場の設備は香港、イギリス、アメリカなどから輸入され、新政府が西洋の技術を導入してつくった最初の大規模な工場であった。操業にあたっては多くの外国人技術者が指導を行った。一方で貨幣のデザイン製作は、日本の金工技術が優れており、彫金家加納夏雄 (1828-1898) らが行った。



10
明治新貨幣と両替屋
New coins minted by the Meiji government and a money changer
作者不詳 Artist Unknown / 19世紀後半 late 19th century 35 × 24 900027

明治政府は当初、江戸時代から引き続き四進法の「両」を単位とする貨幣を発行していたが、1871年に新貨条例を制定し、通貨単位として十進法の「円」を導入した。上部には、円を単位とする金貨（中央）・銀貨（右）・銅貨（左）が描かれている。右上が一円銀貨、中央上の大きい金貨は二十円金貨で、それぞれ中央に龍が彫られている。それまでの金貨や銀貨は、長方形や楕円形などであったが、「円」単位の貨幣は西洋式の製法により円形につくられた。また、政府は円単位の紙幣も発行した。下部には、両替屋の店頭の様子が描かれ、客が円単位の紙幣を手にし、店主が算盤を持っている。文部省が家庭での教育に使うことを想定して発行した一連の教育錦絵の1枚である。



11
品定開化花
Townspeople enjoy a wide range of products after the opening of trade with the United States
守川周重 Morikawa Chikashige (作画期 (fl.)1869-1882頃) / 1879 37 × 72 900519

日本の伝統的な品物と開港後に新しく導入された品物を持っている人々を歌舞伎役者に見立てて描き、「文明開化」により商品の選択の幅が広がったことを表している。「せつた」（雪駄）と「くつ」（靴）、「日傘」（和傘）と「こうもり傘」などと並んで、江戸時代の「天保せん」と明治時代の「銅貨」、同じく江戸時代の「銀貨」と明治時代の「さつ」（政府紙幣）も対比して描かれている。「銀でもきんでもおどろかねへ せかいごぞつてさつの通用」とあり、全国通用の紙幣が使われるようになったことを記している。日米の国旗が上部に描かれ、残りの三方に日米の国旗がデザインされた提灯が描かれている。左右の上部にはアメリカ人とみられる2名の人物が日本の文明開化を眺めている。





12
欲の戯ちから競 Paper money struggles in a tug of war with rice, symbolizing high inflation
児玉又七 Kodama Matashichi (作画期 (fl.) 1880-1890 頃) / 1880 36 × 50 900566

首引きという遊びの場面を描いている。役人の格好をした政府紙幣（明治通宝札、左）が、どっしり構えた米俵（右）に引っぱられ、当時の紙幣価値の下落と物価上昇を風刺している。役人風の服を着て劣勢の政府紙幣を支えようとしているのは政府発行の金属貨幣で、和服を着て遠巻きに眺めているのが江戸時代に発行された古金銀・古銭である。米俵の周りには升に入った豆や酒樽などがある。

1877年に西南戦争が起り、戦費の支出のため政府は大量の不換紙幣を発行した。その後、政府紙幣の価値が下落して、同じ額面の金属貨幣との間に価値の乖離が生じた。これに対して、政府は紙幣価値の安定化を目指して政府紙幣の回収に努めるとともに、中央銀行として日本銀行を創設することになる。



13
不二詣諸品下山之図
Deflationary prices symbolized as people with product names written in kanji characters on their hats
三代歌川広重 (立齋) Utagawa Hiroshige III (1842-1894) / 1883 35 × 72 900503

西南戦争後のインフレを抑制するため、1881年から大蔵卿松方正義により不換紙幣の回収と緊縮政策が採られた。これによりインフレは収束したが、同時に不景気がおとずれ、中小農民の生活が苦しくなるなど社会は混乱した。この作品は当時の状況を富士山の下山に例えて描いている。行者姿の人々が被っている笠には価格が下落した食品や衣類などの品名が書かれている。転んだり、気分が悪くなったりしている人もいる。外国貨幣も転げ落ちる様子が裾野に描かれ、外国人がその様子を気球から眺め「洋銀下る誠に困る」と述べている。一方で、上部では歌舞伎役者が頂上を目指し、諸物価が下がる中、役者の給金は非常に高かったことが書かれている。



「なんほはやく下るとでげがをしてハあぶない」とあり、傘に「洋銀」とある。



「ざんざり」が「髪結」の足を引っ張り、「高利貸し」は余裕で休憩している。



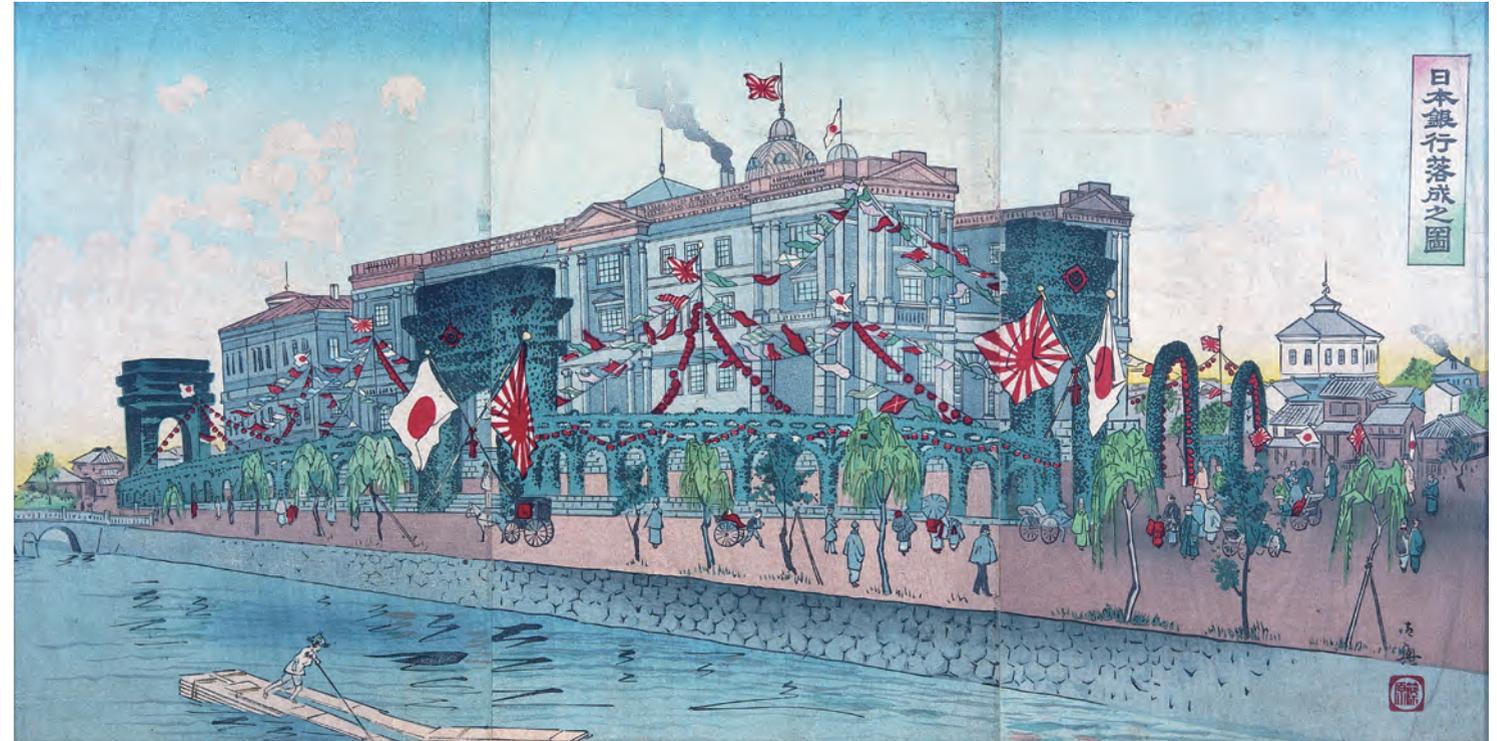
14

永代橋際日本銀行の雪 A snowy view of the original site of the Bank of Japan near Eitaibashi Bridge

井上安治 (安次) Inoue Yasuji (1864-1889) / 19世紀後半 late 19th century 12 × 18 900157

明治初期の金融経済の混乱を収拾し近代的な貨幣制度を確立させるために、1882年日本の中央銀行として日本銀行が設立された。開業当初、日本銀行は北海道開拓使物産売捌所として建てられたヴェネツィアン・ゴシック様式の煉瓦造りの建物(永代橋際)を本店の仮店舗とした。この建物は1881年に日本政府に雇われていたイギリス人建築家コンドル (Josiah Conder, 1852-1920)により建てられた。コンドルは工部大学校で教鞭をとり、後に日本銀行本店を設計した辰野金吾 (1854-1919)はその1回生で、実習で描かせたこの建物の彩色図面には、辰野のサインも残されている。

井上安治は、明治初期に東京の風景版画を多く制作した小林清親の弟子で、1881年頃から本作品を含む「東京真画名所図解」などとよばれる、小型の風景画を多数残している。



15

日本銀行落成之図 Opening day of the Bank of Japan's new head office in Tokyo

篠原清興 Shinohara Kiyooki (19世紀 19th century) / 1896 37 × 76 900054

1896年3月に落成した日本銀行本店の様子を描いている。落成式は3月22日に行われた。周囲には、祝典などの際に建てられた緑門が日本銀行のマークと共に描かれ、正面や敷地背面にあたる北側と、西玄関へつながる西側にも大きな緑門が描かれている。また現在は見られない客溜上部にあたるガラス屋根も見られる。

日本銀行本店本館は1890年着工、1896年2月に竣工し、3月に永代橋そばの仮店舗から移転した。当初は、1894年竣工予定であったが、1891年の濃尾地震を踏まえ耐震性を高めたことや、日清戦争の影響で職人や資材が不足したことにより、竣工が遅れた。手前の川は江戸時代から江戸の物資の輸送に重要な役割を果たした日本橋川で、材木が運搬される様子が描かれている。



16
大日本帝国政府日本銀行全景 The Bank of Japan's new head office in Tokyo
三代歌川国貞 Utagawa Kunisada III (1848-1920) / 1896 37 × 72 900051

日本銀行本店本館（重要文化財）は、日本の国家的近代建築としては最初の建物で、辰野金吾の設計により1896年に竣工した。辰野は設計に先立ち、アメリカの主要都市やヨーロッパ各国の銀行を訪問・調査し、特にベルギーの中央銀行を参考にした。建物の構造は、分厚く打たれたコンクリート基盤の上に建てられた石積み煉瓦造りで、地上3階地下1階建てとなっている。外側の石は1階に花崗岩（北木石）、2・3階に安山岩（白丁場石）が積まれている。本館の後ろ（北側）には同時に竣工した西分館や煙突も描かれている。本店が建てられた東京の日本橋本石町は、江戸時代には金座があった場所である。周りには多くの金融機関があり、川を隔てて大蔵省本省や紙幣寮もあった。

17
東京築地保互留館繁栄之図 The luxurious Tsukiji Hotel, built with Western architectural features in Tokyo in 1868
二代歌川国輝 Utagawa Kuniteru II (1830-1874) / 1870 37 × 75 900185

1868年東京築地鉄炮洲居留地に外国人向けのホテル「築地ホテル館（Yedo Hotel）」が竣工した。設計はアメリカ人建築家のブリジェンス（Richard P. Bridgens, 1819-1891）が行い、施工は日本人の大工の棟梁、二代清水喜助（1815-1881）が行った。木造2階建てで客室は約100室あった。中央に描かれているベランダや煙突は洋風だが、壁は海鼠壁であるなど、擬洋風建築（和洋折衷）で、新時代の建築は多くの人の目をひいたが、1872年に大火で焼失した。





19
東京駿河衛国立銀行繁栄図 A prosperous banking district in Tokyo
三代歌川広重 Utagawa Hiroshige III (1842-1894) / 1874 36 × 75 900117

商業の中心地であった日本橋駿河町の様子を描いた錦絵。三井組の銀行として建設した海運橋の建物を第一国立銀行に譲渡した後、三井組は新たに自前の銀行設立と建物の建築に取りかかった。右奥の木造3階建ての和洋折衷の建物が「為換バンク三井組」で、二代清水喜助により設計され1874年に竣工、1876年には「三井銀行」となった。第一国立銀行の建物と共に東京の新名所となり、新聞や錦絵に多く取り上げられた。左の手前の建物は江戸時代から続く三井家越後屋呉服店で、現在も三越として営業している。中央に描かれている通りの奥の右側が後の日本銀行本店の所在地であり、その向こうには皇居（江戸城）と富士山が見える。

18
海運橋為換座之図 A bank near Kaiunbashi Bridge in Tokyo
昇斎一景 Shousai Ikkei (作画期 (fl.) 1871-1872 頃) / 1872 37 × 75 900069

1872年に東京の海運橋そばに建てられた（為換座）三井組の建物（海運橋三井組ハウス）。築地ホテル館を施工した二代清水喜助により設計・施工され、日本人が設計から手がけた擬洋風建築としては最初のもの。洋風のペランダのほか、城郭風の五層の最上部には展望台があり、特異で壮大な外観は人々の注目を集めた。この建物は、当初三井組の建物（海運橋三井組ハウス）として建てられたが、政府の方針により実際には竣工の翌年（1873年）に第一国立銀行として開業した。なお、国立銀行は、アメリカのナショナル・バンクをモデルにつくられた民間銀行のことで、銀行券も発行した。





等級別の運賃が書かれている。

20

東京品川鉄道蒸気発車之図 A steam locomotive departs from Tokyo's Shinagawa Station

三代歌川広重 Utagawa Hiroshige III (1842-1894) / 1873 37 × 74 900188

日本で最初の鉄道は1872年5月に品川と横浜の間で仮営業を開始し、9月に新橋と横浜の間で正式に開業した。描かれているのは品川駅から発車した蒸気機関車である。海辺を走る鉄道は、文明開化の象徴的な風景として、外国船や馬車と共に多くの錦絵に描かれた。上部にはローマ字でも作品のタイトルが書かれている。左上には、汽車の発車時刻と、等級別の運賃が書かれており、東京—横浜（上等）は1人1円12銭5厘とある。跨線橋には明治時代になって登場した人力車、その向こうには電信柱や洋式灯台が描かれている。

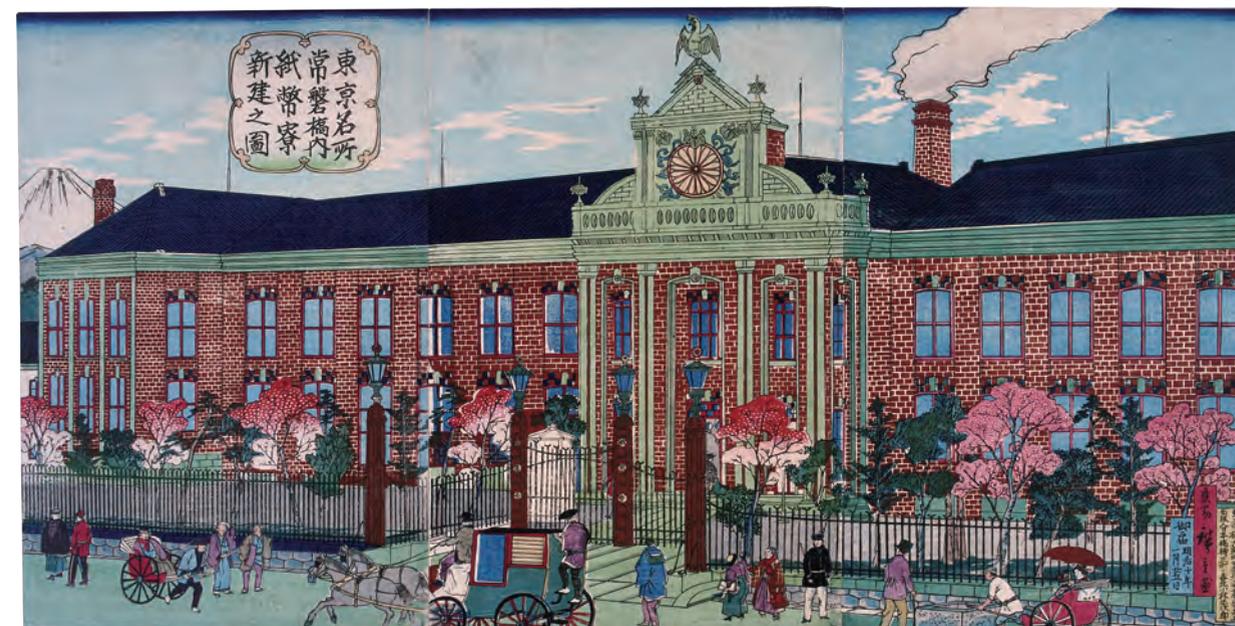
21

東京名所常磐橋内紙幣寮新建之図 The Paper Money Bureau in Tokyo

三代歌川広重 Utagawa Hiroshige III (1842-1894) / 1877 37 × 74 900020

1876年東京大手町に竣工した西洋式2階建ての煉瓦造りの紙幣寮の工場である。正面の上部には菊の紋と鳳凰の像が意匠としてつけられた。イギリス人ウォートルス（Thomas James Waters, 1842-1898）とフランス人ボアンヴィル（Charles Alfred Chastel de Boinville, 1850-1897）が設計と工事監督を担当した。

新貨条例が制定された1871年に大蔵省紙幣寮（当初は紙幣司）が創設され、紙幣の発行を管轄した。明治政府が発行した新紙幣「明治通宝札」は当初ドイツで製造されていたが、政府の国産化の方針のもとで、この工場がつくられた。欧米製の製版・印刷機械の導入により、紙幣や切手など日本の近代的な証券印刷物の製造基盤ができた。1896年には日本銀行本店が常磐橋を挟んだ隣に移転してくることとなる。





22

江戸橋ヨリ鑑橋遠景 View of Edobashi and Yoroibashi bridges in Tokyo

井上安治（探景） Inoue Yasuji (1864-1889) / 1888 38 × 76 900115

この作品が描かれた年に竣工した中央の洋風建築の渋沢栄一郎と左の鉄骨トラスの鑑橋を中心に、明治時代の日本橋川の光景が広がっている。渋沢栄一郎は、辰野金吾の設計によるヴェネツィアン・ゴシック様式の建物である。渋沢栄一（1840-1931）は第一国立銀行など数多くの企業の設立・経営に関わり、明治時代の実業界を牽引した。右側の眼鏡橋が江戸橋、右側の高い建物が第一国立銀行である。左には土蔵が立ち並び、積み荷を運ぶ舟が行き交う江戸時代以来の風景が描かれている。